

自汗集（『信長記』卷十五之下所収）

長谷川 泰 志

前 言

小瀬甫庵の『信長記』『太閤記』が、それぞれ、信長、秀吉一代の事蹟を記すに独自の儒教史観をもってなされたことは両書の大きな特徴となっている。そして、その最も顕著なかたちらが『太閤記』における「八物語」（巻二十、二十一所収）であり、『信長記』における「自汗集」（巻十五之下所収）であった。この自汗集は、古活字版信長記には収録されず、寛永元年の跋文を有する整版本に初めて収められる。以降、同二十一年版、寛文十二年版に引き続き付されていく。このうち、横井久左衛門の板行にかかる寛永二十一年版は、甫庵の出版書物に初めて書肆名が明記されたもので、信長記諸版中、唯一漢字平仮名交じり、目録の整備、振り仮名の大幅増補など、読者を念頭に置いた書肆の営為がうかがえるものでもある。本稿では、この横井板行本を底本とし、甫庵の儒教史観と執筆態度の変遷を辿る前提として「自汗集」の翻刻を行なうものである。尚、信長記そのものの書誌に関しては、位田絵美氏の御論考（『甫庵本『信長記』諸版考——元和寛永古活字版をめぐって——』東海近世 第五号 平成四年十二月）が備わっているので、ここでは重複を避けることとする。

凡 例

一 底本には、寛永二十一年横井久左衛門板行本（長谷川所蔵本）を用いた。同本は、十五卷十二冊、漢字平仮名交じり、「寛永甲申仲冬上旬／横井久左衛門刊行」の刊記を有する。このうち、自汗集は卷十五之下、第十九丁から第四十五丁までの全二十七丁分である。

一 出来るだけ原本に忠実になるよう努め、仮名遣い・振り仮名・送り仮名・仮名文字の清濁・句読点・反復記号・誤字・宛て字は原本通りとした。

一 漢字は原則として現在通行の字体に改めたが、異体字のうち当時の慣用に従って残したものもある。

一 各丁表裏末尾に「印を付し、（ ）内に丁付を記した。

翻 刻

古にいはく。文武を総（かんぶをそう）。剛柔を兼（かうじうをかね）るものは。良将なりと。この語にもとつき。世の盛衰をあんするに。純剛に純強なるは。一往草創（いちわうそうそう）はありといへとも。守文（しゆぶん）ひさしからず。純柔純弱なるは。守成（しゆせい）うるはしけれ共。威のよはきところあり。剛柔かねそなはり。度量（たくりやう）ひろく。あつく政学（せいがく）をこなふは。創業（さうげう）守文ともにとめてたし。是人にしていはゞ。筋骨（きんこう）まつたきゆへなり。それ剛強のみなるは。周身（しうしん）みな骨にし。柔弱のみなるは一身みな筋にして。筋骨ならざる人なるへし。是豈（あた）なかくたもたんや。さればこの書。武にはじめて。武にはらん事。孤陽（こやう）生ぜず。独陰（どくいん）ならざるのうれは。かくのことくの事になん。はんへらんやと。おもひつゝけ」（19オ）此つたなきこし折（おれ）うたをつゞけて。此

書を終ふ事文武兩輪し。陰陽和合せんの祝意をあらはすのみ。誠にうたのさま。こと葉の花さくにもあらず。樵夫のその本にやすらふたくあにもあらされは。色もなく香もなく。また実もなく。たゞ三十一字をかる計にて。山賤の声をこましく。海士のさえつりにひとしきをもかへりみす。啗舌のかはく間なからん事をもちとはす。剩さへ梓に録めし事。偏に世々の笑種となるへきは掌ろをさすかことくなん侍れとも。若同志の人有り恤み見つ、心盲心聾を開へきたよになる事もやと。寸志を伸了ぬ。よつて嘲りを自ら招き頼にみづから汗す」(19ウ)

自汗集

○政要

政要はたゞよく人をするにあり他をもとめなば功はあらしな

それ宰相有司職などにあぐる人をば衆にも撰国にもとひ。なをよくこゝろみあぐるときんは。官職そのところを得くはんしよく其ところを得るときんば。天下国家卒にみだるへからず。吁これたれか福ひならん。もつとも人を知事やすからず。されは變遅知をとふ。孔夫子人をするとのみ。こたへさせ給ひき。まことに気味はなはた長せり。それ国家をたやかならぬときは。その朝に其人なきとしるへし。棟梁の」(20オ) 人くらき時は。国内なにとなく和せず。其風いといやし。あきらかなるときは。賢哲野にのこる事なし。同類あひもとむればなり。いつのころより挙措の清撰なきにより。諸国の宰相等。をくは鵜に鳥をくはせ。鷹に魚とらせん事を。仕入るにひとし。是によつて其国の政事萬差す

ものことに真のいませるところありなとまつりことにおもひとらざる

それ毎物。それ／＼の中あり真あり。国主政道の中真ととりて。まもりたまひなは。日本は陰陽半し。土石よろしき
 にかなひ水清し。かるかゆへに人心曉かりしあひた。その徳に化せん事。もつとも速（20ウ）かなるへし。周の八
 百余歳の祚をたもちしも。上に一人泰伯のおはしまして。その真をよく守りたまひしゆへなり。伯のいはく豈祧糠を
 もつて大真を累すやとの給ひつゝ。を、くの国を辞し。文王昌にゆづりたまひき。これ昌聖徳おはしまして周の代を
 ひらき。兆民の父母たらん。国器有しをよくしりたまひてや。噫その真をまもり給ひなは。日本は小国なるあひた。
 周の大国をおさめんよりは。なをやすからんか

国民をやしなふみちのかんようはたゞ賢人にしくものはなし

萬物みなそのやしなひあり。ことに国家をやしなふ（21オ）道は猶あるへきに

こゝろとき人を国家のはしらにし立つれば下によこしまはなし

日出て乾坤か、やくかことくならん

人道をたゞしく恩義あつくせよこれぞまことの政要の本

人道は。夫婦別あり。父子親あり。君臣義あり。長幼序あり。朋友信あり。人道かくあらまほしきと上強て好たまひ
 なば。下をのづから其化にうつり。太平期せざるにあり。されは程子のいはく。倫理を正しくするときんは。尊卑の
 分あきらかなり。恩義を篤くするときんば。上下の情合すとかや。上下の情合せざると（21ウ）きんば至治なし

まことあるなさを人にほどこさば千世をふるともなとみたれけん

智にとをきは恩義に虚実あり。虚なるときは受るところのものも。虚をもつてす。実なる時は。うくるところのもの。
 また実を以てす。実なるときんは。終にみたるへからす。虚なるときんは。つゝあにおさまるへからす

かしこきに政事とはぬは独夫なりとひもとめなばさかへさかへむ

噫舜王の叡才にてさへ。政事とふ事をこのみ給ひしを」(22才)

音もなく香もなき政味あまなへる君も人なりなとおもはさる

国家をしる人こゝろ国家にあらは。をよばぬきはの政味出来らんかし。回意舜何人そや。われ何人そやと

雲のちかくみえぬる松の根さしこそおもひのほかにはひこりにけれ

つらく毎物標本のしなくあるを案するに上下身をおさむるを以て。本とし。牀とし。その徳行をほどこそすをも

つて。標とし用とす。いつれの明王も先身をおさめて。而してのちに徳沢をほどこし給へり。ある人のいはく。身を

おさめさせん法あらんやととふに。」(22ウ)こたへていはく。身をおさめたる者のみに高位あるひは受領等をこな

ひたまは。豈止る事をえんや。かくて君臣方寸の玉たがひにみか、れ出て。明光国内に満々として。期せずして

至治あらん。伊尹傳説も身をおさめて。もつて時をまち得し人なり。松の高くたちのほるも其本根つよく。おさま

たるの故也。噫人として松にたもしかさらんや

政要の損益はたゞふたつなり賢をたつとひ佞を愛すと

このころ古往治世のいとめてたくさかへ久しきは。賢哲の人をよくもちひ。利害損益を評論し。その損害は毒虫をい

むかこくと去にあり。治世の」(23才)久しからず。其名後代にけかれしは。小人佞人などへつらひおもねるにおほ

れてや。まことに甘味を一朝一夕にこゝろよくし。その身積虫にはろぼさるゝかごとし

政道はかしこきによくまなびとへこまかに察しゆるくをこなへ

それ世中の事々物々は。漸を以てなすをよしとす

○君道

あめつちのそのやしなひに身を恥てあまねく君か徳をほとこせ

それ大人は物を容る事ありて物をすつるなし。ものを愛する事は有とも。物にしたかふ事なし。」（23ウ）天のみちまた然り。天直きをもつて万物を養ふ。それ天にかはつて物を理するものは。曲成して其直きを害せず。斯に道を尽す

をのつから得たるところのその才をつかひあてぬそあはれなりける

才者任するところの言行足てする事あり。これ才なり。鷹は鳥をとり。鵜は魚をくふ。是する所あるの才なり。人の才芸それ／＼の得たるところあり。然るに一朝一夕の媚にまよひて。その人にあらぬ者ともに。宰相有司職等こと／＼く。た、一人二人兼与し。その責任をおもくす。これつねのちからあるものに。数百人もしてはこひなん。大」

（24オ）石をあげよとせむるに同じ噫

民のために天の立をくその君を理にしそむかはほろびさらめや

程子のいはく。民のために君を立て。これをやしなふゆえんなり。たみのみちそのちからを愛するに在。民力足ときんば生養遂。せいやうとぐときんば教化をこなはれて風俗美なり。かるかゆへに民のために民力をもつて重しとす。それ天国に君をたつる事。大厦を送立するには棟梁を居。しきしまの道に和哥とてをすへて。褒貶そのところを得るが如し。然るに国を領しては。その職を勤めす。まづ威名にほこり。あるひはをのかこゝろにまかせ。人を好」（24ウ）悪し。賞罰は貴賤をもつて輕重し。あるひは人を挙るにも。その徳其才をはえらます。その縁其やから。又は聚斂の臣をもつてす。これみな天の命をそむくなり。かるかゆへに久しからすして亡ぶ

君か代のたすけとおもひふちしをく才のみたかき臣は毒虫

それ大臣あるひは寵臣。あるひは群行職にある人。卓才を事とし。名利の官を出やらず。忠義をおもはぬたぐあは。みな毒虫に同じ。国をみだし君をあやうくするをもつてなり。名は君臣たり実は仇敵たり。吁近世の毒虫を、くとき

めく也。御用心候へく」(25才)

かねてより代の長短はしられけり舜禹桀紂か、みならずや

案するに。夏商周の長久なるゆえんのもの。それすでに事しるべきなり。然るにしたがふ事あたはざるもの。是聖知に法とらざる也。桀紂の承絶するゆえんは。其轍跡見つへし。然るに避る事あたはざるは。是後車またまきに覆とする也

こ、ろた天下国家にあらぬゆへわづらひけりな政道の是非

まつりことの害は理非のわづらふより大ひなるはなし。周公のこ、ろは天下国家にあつて。その身にあらず。とかや。噫官職にある人。そのこ、ろ官職にあらば。」(25ウ)官職きよく。民もやすくながくさかへん物を

あめがしたによく正さんとおもひなば理学心理学知行かくなよ

賢臣は天よりあたへたまひければ道をつくしてあつくうやまへ

よき賢臣を得たまは。天の賜にやと真をつくしてもちゆべし。是それをこなふところ正しきなるによつて。天より治世の永久をあたへ給ふなるへし。こ、をもつて真をつくす

国をさり人のを、きはいにしへの民の父母の君まさぬゆへ

孟子のいはく伯夷太公の二老天下の大老なり。而て」(26オ)これに帰せは。これ天下の父これに帰する也。天下の父これに帰せは。その子いつくにかゆかん

天下ひさしくたもつ君はた、徳義つとめてをこなふにあり

案するに徳義を尊用したまふ湯王は地方七十里にして興り徳義を尊用せざる桀紂は天下をたもつといへとも亡ひき。それとくぎの大功ある事道知れる君子にあらずんは

○賢を用ひるときんは自由を得

ふかく察よ自由を得るは鳥には羽国主に賢士けたものにあし
国守何として真の自由を見得せざるや」(26ウ)

法制のかずあるも何きはめては理学つとめて賢に任せよ

凡て国守聖賢の人に任するときは。大功期せずしてをのつから成す。賢なきときんば制法出るとも。その功なく。かへつて苛政におなじうする諷誨あらん

うちそとや右やひだりをえらひつゝ、ふかくつゝ、しめ挙措の政要

人君の晦明損益多は。近習の臣の明不明にもよる

功あらん臣をこまかに察しつゝ、職に任する君は幾千代

能を察して而してのちに人をつかふは。成功の」(27オ) 君なり。行を論して而してのちに。まじはりをいる、ものは立名の士なり。されは宰相には知の明。信の篤。行の果。中和ある人をあげもちあるは。これ治世長久の君なり。食物に比していは、この人糲餅なり。才芸ともしからす共。まことなき人を用は。土餅なり。食不食。自知冷暖すべし

数／＼の評あらむよりたゞひとり国たましゐの人をえらへよ

日出て天地の闇はるゝかことくならん

○清撰にあふ聖賢

かしこきかときめく朝にはきはひぬ禹稷^{うしやく}皋陶^{かうよう}伊尹^{いしん}周公^{しゅうこう}」(27ウ)

世に見所の妙なるといはんは。皋陶^{かうよう}。伯益^{はくえき}。禹^う。稷^{しやく}。契^{けい}。呂望^{りよう}。四皓^{しこう}。三傑^{さんけつ}こときの老臣^{らうしん}。君前をときめき。ふるまふにしくはあらし。かくのことくの朝には。制れ共小人^{せいぞうじん}佞人^{ねいじん}なき物なり。逸物^{いちぶつ}の猫^{ねこ}のあるやとは。ねすみおそる、かことし。まことしからぬ大臣^{てうしん}寵臣^{ちゆうしん}などときめく朝には。小人^{しょうじん}等^{とう}めさされともおほくあつまり来て。威^いをふるふ。賢愚^{けんぐ}みなその類^{るい}に集^{あつ}まる

○臣道^{しんどう}

つかふるは悔^{くゐ}あらんをまかへりみすよき忠^{ちゆう}に義^ぎに身をゆたぬへし

つかへて恩禄^{おんろく}を食^はからは。身^みを君^{きみ}に群^{むら}らんこそほいなるに。あまつさへをのれを利するもあり。却^{かへ}」(28オ)てうらみをむすふもあり。それ高職^{かうしやく}にあつて威^いたくましくして。忠義^{ちゆうぎ}を外^{ほか}にするは。みな盗跖^{たうせき}か徒^となり。第一^{だいいち}の不忠^{ふしゆう}。義不義^{ぎふぎ}の氣味^{きみ}を知^しす

臣^{しん}はた、五つ^ごの常^{つね}をむねとして身をおさめつ、君につかへよ

仁義^{じんぎ}礼智^{れいち}あるを人とす。これなきは禽獸^{きんしう}に遠^{とほ}からす。されは五つのつねなきものに。君臣^{きんしん}の道^{みち}をおさめさせは。兩^{りやう}道^{みち}かれさらんや。かなしきことのいたつてかなしきは。君臣^{きんしん}のみちきよからざるにきはまれり

君をのみそりかちなる人はたゞ伊尹^{いしん}か行^{かう}を取^とぬなるへし」(28ウ)

伊尹^{いしん}は何れにつかふるとしてか。君にあらさらしめんとし。其自任^{きじん}するに天下^{てんか}の重^{おも}をもつてす

苞苴^{ほうそ}ほと忠^{ちゆう}をとろかすものはなしふかくつ、しめ功臣^{こうしん}の門^{かど}

世もつてこのたくゐおほかりき。まことに功忠^{こうちゆう}ある人。あるひは寵臣^{ちゆうしん}。あるひは宰相^{さいしやう}等^{とう}の門^{かど}には。獻納^{けんなん}虚^{きよ}日^{じつ}なく。

一つとしてこゝろにかなはぬ事もなき物なり。然るに聊かの苞苴におぼれて。その人にあらぬをも君前にしてよくとりなし。濫望を達し不次非礼の賞を申あたふ。是一をもつて百を害するの臣世にふかくつゝしむべきものは。この外にをゝく覚え侍らす」（29オ）

○孝忠烈をたつとふ

卓才や孝ちうれつゝのそなはれる人の罪をはなためをくへし
此三等にもかきらず。政才に達したる宰相有司。あるひは儒学理學に熟せしものからの。つみもこゝろしてをこなへは。至人その中より出る事あり。至人いつるときんは国直し。くになをきときんは治世いと久しく萬物。そのところを得て安し

○うれふるへき事憂るときんは愁なし

憂ふへきみちをうれへよ世のうきをなげくは民のうへにこそあれ
それ王公より士庶人にいたるまで。うれふるみち」（29ウ）たがはさるときんは楽しみ生ず。道たがふときんは悲生ず。工商のかなしみ生ずるは。その職をつとめざるにあり。国主の悲しみ生ずるはよき人を扶持しをかざるにあり。されは堯は舜を得ざるをもつて。をのがうれひとす。舜は皋陶を得ざるをもつて。をのか憂ひとすとかや

○賢君のおこなひ

をのれ虚に理にとまりつゝ、善をなすは民の父母の君にそありける

衆につゐてをのれをすつるは堯なり。人を与て善をなすは舜なり。善言を聞て拜するは禹也。人をもちひてをのれをおもひ。過ちをあらためて吝(30オ)ならざるは湯なり。聞すきいて式り。諫すいさめて入は文王也。むかし今上下自滅せしむる人をみるに。をのれを思ひ過すによれり。是天にさかふて。永久をはかるゆえんなり。それをのれ虚にして理にと、まり善をなし。世の邪法を正さんと思ふ君。大地ひらけてより。一人もあしくほろびたる事やはある

○闇君のをこなひ

欲におほれ莒花にはこる君こそは理に闇ふして義にうとき也

こ、に至て日没し乾坤くらきかことし

智をかさり善をいつはりたのしむは」(30ウ)世をさるみちをいそく成けり

この行をみるに。政道の上にこ、ろをくるしめ。世を安からしめんとは。おほさるましきなり。これ在位の君子のをこなひにあらず。全く天の命をそむけるなり。天豈その榮久を守らむや。吁天世をさらする事をいそくにあらず。をのれいそくなり

物の毎にくはしからんとつとめつ、きみたるみちはつゆも暁せず

今の世の君子はこの類病骨髓にしみこふて。療治にか、はりかたきあり吁

○学道

身をおさめ人をも正しこ、る虚に」(31オ)理にしたかふそ学の本なる

且、是非をもわくるほとの人。理にしたかふて行なはんと云。然れともこ、ろを虚にせずして。順ふにより。こ、

ろのとかなし。あるひはをのつからの私心くははりぬ。聊かも私心くははりぬれは。至理に非ずして。終に似せ物に同す

人ををしへひとになさんとひたすらにつとめぬるこそ学のみちなれ

よくく工夫して察したまへ。千巻の書を誦すれとも。人の人たるはまれなり。たゞ学者のつとめは人にひとたるみちをしへ。ひとになさんこそ

一すしにまなびつとめて胸中に(31ウ)理をすましめて義にくはしかれ

君子は理をもつて学を説。小人は舌をもつて学を銜ふ。これ胸中に理をすましめす。義にくはしからざるかゆへなり

世の中は王莽か徒にて暮にけん学のやまひをあらためなくては人倫の正をたてんとおほされは。政学の病ひよりあらためはじめて後忠に似たる不忠。是に似たる非を正し給ふへし。かくのことくしたまは。勞せずしてかならず功あるへし

君か世のいくひさしくもさかへなん和器宝剣は理學心學(32オ)

或人のいはく治世の久しからぬは。雜学の真學を乱すにありと。妙寿院これを聞いていはくこのことよしと

○武

せめもせずた、かひもせず義をもつてまつたく勝は善の善なる

中く／＼に他の兵をさへ屈しなはゆるくおさめよた、かはすとも

いきをひと時と利にのる明將は火にさへやけず水におはれす

いはんや戦場にして死をいたさんや

主と將は一をもつては萬をとり」(32ウ) みちをひまなく往還へし
それ主將の法のつとめは。一をもつて萬を取。侍るへきみちを常く工夫し。國家の繁榮を思ふへし。凡て一をもつて萬を取りまじ國家繁榮のみちは。たゞ賢臣をもとむるにあるのみ

先たてはまつことありてしつかなりをくれていそく將に利はなし
た、かひにのそむ時には死をかるくす、めは榮をたもつとそいふ
あらそひとねたみなからん事をのみ義して制してつねにをくべし

軍法は戦場にしてにはかにたちかたきもの也。」(33オ) つねく理と義とをもつて制しをけは。軍法至剛なり

こ、かしこをしへにかはれるしなあらはくはしく察しこ、ろみてしれ

孫子にいはく。兵いかつてあひ近き。久しくして合せす。又あひさらずんば。かならず謹而これを察せよ。此類疑あるときはいつれも油断あるへからす

数くくの怪虫ともなふいくさにはあまつめくみの利こそありけれ

家康公慶長かのへ子。東征の時。八幡のかたより寸内の白虫を、く現来して。栗田口さして東せしなり。予またこれをみる」(33ウ)

重くかるくかけひきもえつ理に曉き人を國家をしるへかりける

かやうの人出来りなはみやつかふへし。大望を達する事あらん信長公につかへし人。飛龍青雲にあるかことくなりしをもつてみるへし

○萬物の成て其理ありその具あり

農工のわざをなすにもそのぐあり世を治むには才のある人

才のうちに智をこめ賢才にしてみるへし。唯王侯より士庶人にいたつて。辛慶にをよばんとては。先の才ある人あつまり来て威あり。衰窮に及ばんとては先て此人ほろぶ。俱に符節を合る」（34オ）かことし。百里奚か去就にても

○古道を信す

いにしへのみちにまかせて身をおさめあらたまりぬる春にあふかな
梅は寒苦を経て清香を発すとかや。この清香をたれか望まざる。噫のそむ道みちにあらざるか故に。天のたすけなし。天のたすけなきときんは。大香は発しかたし。望道他なし堯孔の道のみ

○稽古

それ堯制は茅茨伐らす。椽椽けづらすとかや。されは安宅の冬康も。異朝明王の徳風。我朝はかた計もなく。世俗の澆訛事の外なりしを。いとふかふ痛」（34ウ）つゝかく侍り。いにしへをしるせる文のあともしさらすは。下るせとは知しをとなん。まことに其ころにして。冬康妙なる心さしなり

よき人といはれし人のをこなひはこゝろすなほに利欲なかりき
今の世人は多く是に反す。たゞ種々の方便つくしぬれとも。平人たも其風をしるき。況や達人をや

○果行義を主とる

物を成す人の取なるかなめには義のいましぬる緩急の中

それおもんみるに大功を成せん人は。そのつねかはるところあり。中／＼及はぬきはありといへ共知人な(35才) ければ。奴隸の手に恥かしめられて。朽にき。おしひかな。孟子にいひく大人は。言かならず信ならず。行かならず 果ならず。たゞ義のあるところのみと。尹子はいはく。義を主とるときんは。果その中にあり。果をつかさるときんは。いまたかならず義を合せす。又要のかなめなるは。其奉行人を清撰すへきにきはまりぬ

○大志あるときは枉て人情に順ふ

あをやきの糸よりななきこゝろして世におふしつ、時にあふへし

をのれなすところ。假合至極の理なりとも。諸人いなみおもは。それにしたかふへし。しかはあれとも心の(35ウ)みさほをは易ふへからす。衆口金を鑠し積毀骨を銷となんいひつたへぬ。されは機変くらき人を、く。この害におちいる

○うれひを微に防ぐ

はるたつといふはかりにやみよし野、山もかすみて今朝はみゆらん

それ物の小なるもほとなく大に及ふ事。うすき霞のいつとなく。大山をうつむかことし。これは極小の事なりとて。小悪をもなすへからす。それかそれならぬほどの悪事なるにより。人も見ゆるし。我亦おほえす積りかさなる時は。君も神もゆるし給はぬ事になるとぞみえし。古にいひく尺蠖つ、み(36才)をうかちてよく一畝をたゞよはす。寸煙突もれて千宝を灰にいたす。又両葉さらされは斧柯をもちゆとかや。小悪のをさへやすき事。両葉を制するがことし

○強^{しやう}て幸^{さい}ひをもとむるときんは禍^{わざはひ}ひ生^{しやう}す

はかなしやさかへんとおもふいとなみをすこして身をそほろほしにける

大小このうれひを自作^{じやく}して。千悔^{せんかい}する人多^{おほ}し。禍^{わざはひ}は多欲^{たよく}より大^{おほ}ひなるはなく。富^{とみ}は知足^{ちそく}より富^{とみ}はなし。欲心^{よくしん}勝^{かつ}ときんは。物にしたがふ。ものにしたがふときんは身^みかろくしても重^{おも}し。物重^{おも}きときんは。瞽然^{こうぜん}として窮^{きはま}りなく。その身をうしなはされは止^{とど}まらず」（36ウ）かるかゆへに聖人^{せいじん}の聖人たるゆえんは。その欲^{よく}なきをもつて也。をしなへて世をなく盛^{さか}んと欲^{よく}せざるはなし。然れとも早世^{さうせい}するはなに事^{こと}そ。たゞ理^りに背^{そむ}き義^ぎを外^{ほか}にするか故^{ゆへ}也

○取^{しゆ}予^よをつゝしむ

義^ぎにあらで取^{しゆ}予^よするはた、君臣^{くんしん}の言^ごと聲^{こゑ}とのわつらひそかし

耳目^{じぶく}のあかさは輕^{かろ}し。こゝろの言^ご聲^{こゑ}は。極重^{ごくじゆう}にして。国^{くに}をほろぼし。名^なを後代^{こうだい}にけがすは。この煩^{わづらひ}より起^{おこ}つて。而^{しかう}していまの世の取^{しゆ}予^よはみな私心^{ししん}也。孟子^{まうし}にいはいく。義^ぎにあらす一介^{いけい}といへとも予^よせず。義^ぎにあらす一埃^いといへとも受^{うけ}す。まことに進退^{しんたい}辞^じ」（37オ）受^{うけ}極^{ごく}をとつて変^{へん}せず。極^{ごく}を用^{もち}ひて乱^{みだ}さずと。されは国主^{こくしゆ}国家^{こくか}を我物^{われもの}となして。進退^{しんたい}すへき事^{こと}にはあらず

○徳義^{とくぎ}を勤^{つとめ}て位職^{いしやく}にすゝむ

さえありてはかりもひろきまめ人のすゝむくらゐはいともことわり

此外^{ほか}をもつて位^{くらゐ}にすゝめは義^ぎにあらす。清^{きよ}くありたき物の極^{ごく}は。宰相^{さいしやう}職^{しやく}の辞受^{しじう}なり。古^{いにしへ}にいはいく宰相^{さいしやう}職^{しやく}は萬物^{ばんぶつ}の神也

と。此人の度量窄狭なれば。人物の気海ほかにいたつてちゝむ。噫政道の害これより大なるはなし。容せずとなく。然してのちに屈伸のみちを尽す。至つて虚なるときんは。伸」(37ウ) ずといふ事なし。君子はあらそふところなく。幾か屈伸の感を知るのみ。精義神に入。まじはつて不爭の地を伸。したがつてこれよりはなはたしきはなく。利これより大なるはなし。才徳なくして位職にある人。時にあひしたりかはなるは見苦

○志し大なるときんは才大し

こゝろさしひろきは才もいとひろし是こそくにのうつはものなれ
 若この人国家の執権にあらは。すぎやより書院に出て。まくらなと物し。熟眠ののち。一曲かなでたるがごとくならん

○謙」(38オ)

才にそひ徳はあれともかしこきにとひたつねつゝをこなふはよし
 それ国の群行にえらひ出されし人は。才徳かね備はるへし。しかはあれとも猶よく賢にも老人にもとひ。その外とふへきものにたつね。よろしきにしたかひをこなふへし。凡て下問にはつるは君子にあらずとなり

時にあひつかさくらゐをするかとのわひしくすめるおくそゆかしき
 そのほとくにしたかひありのまゝに侍らんこそ。謙なれいまは。家居等までも過分す。むかし泰時あまりに住あらし。かこふかきほもひまあらはに」(38ウ) て内までみえとをりしを。用心のためなといひまきらかし。かろくしくもつき立まいらせんと。諸侯の人々望しを。やす時もいみしき事におもはれしかとも。国々より上下せん人力のいたは

りも。さそ甚はたしき事になん侍らんかし。又用心の事は。わか運つきなは。鉄の筑地の内にありとも。のがれ候ま
しとかたく辞し給へり

○善悪俱に長す

難波津のよしあしをのみつみをける人のゆく衛は安危とそなる

諸侯寵臣等の云為を。をしなへて讃める事尋常の人情なり。殊に功の入たる佞人は。言の葉よりは」（39オ）かは
さかをもつていとふかう感す。是によつてよきもあしきも。長しもて行事昼夜を舎す。積徳は王と成。積怨は亡とな
る。荒舜は是をもつて昌。紂は是を以てはろぶ。よしあしの積るゆくゑ是をもつてみるに。いさ、かもたがふ事なし

○感をわきまふ

まことなるこゝろもなく富なんといのるともよし神はうけしな

それ神は非礼を受す。正直のかうべにやどるとはいはすや。然るに何／＼まいらせん。此事成就し給へ。又このを
こなひを修せんと云。嗚呼神と人との商ひ事。いとめつらし。唯仁孝誠に敬をつくしいのる」（39ウ）時は感応ある
とそみえし

○尊臣

くに民をたゞさんとおもふ忠臣は君のこゝろにたかふものなる

これ直言諫諍せしによつてなりたつとき事これよりはなはたしきはなし

○卑臣ひしん

そくはくのくにの費ついでをする人そ君のこゝろにあひにけるかな

君主くんしゅ悪あくをこなひたまへは。悪あくのまゝにしたかひ。非礼ひれいをこなへるにも。またしたがつて。いさめとがむる事なし。是これによつて賞禄しょうろく篤あつく。威風いふう〔40才〕もつともはけし。いやしき事これより大なるはなし

智ちを銜をくはふ人を直すくなといひなすはおなしなかれの瀬々せせのしらなみ

寵臣てうしんくらければ。媚こびへつらふ小人せうじんを。廉れんなりといふ御ごためによき直言ちよげん諫諍かんじやうの臣しんとは。犬いぬと猿さるとの如ごとし。是君これきみをあやうくし。国をなやます毒虫どくちゆう也

○真宝しんほうを得

つねにしもこゝろのたまをみかきぬる人はまことのたからをそ得る

それ真宝しんほうを得うるとおもふ人は。直なきをもつて心をやしなふへし。古こにいはいく君前くんぜんにおめて。天地てんちの〔40ウ〕たからあり。宝たからにこゝろなきは。これを得る。たゞ宝たからをえんとおもふ心なくして。国家こくかのためのみおもひて身みのためにおもひもとめぬもの。よくこれを得るとなり。是順道じゆんたうなり。此外そこのほかをもつてもとむるは。逆道ぎやくたうなり。智ちの明めいをやしなふに。晦くはいをせざるは。至養しやうにあらず

○虚実きよじつ二障しやう

ひたすらに虚実きよじつの実をたゞしみよ真しんのわつらふ国はみたる、

似せ物か真を煩はする時は二障のみす。是必亡の兆しなり

○行跡（41オ）

くもりなき夜半の河風月さえてそのまゝ、あくる軒のしらゆき
信道かをこなひは。蘭薫。雪筥。玉粹。金精のごとし。愛しつへし。したしむへし。師とすへし。敬すへし。今世に
おふせぬ人なれば。絶俗の風あるをも知す。成にき。今もかやうの人有とも。また件のことくならん。是により哲人
出来ぬ事になん侍るらし

○善国を治るは讒邪を去

ものことのさはるやまひをはらひつゝ、きよきひかりの月をこそみれ
それ一物くゝに邪疾なきはいとまれなり。又邪を払みるに難も稀なり。月光に浮雲。政道に讒邪何（41ウ）れもは
らふみちあり。古にいはいく讒人のよく国を害するは。猶根莠のよく苗を害するかことし。かるがゆへに苗をよくする
は。かならず根莠を去るくにをよくするは。かならず讒邪を去。かなしひかな清風浮雲をはらひし後。月をみる人は
あれとも

○長臣の不忠をかなしむ

敷嶋にいたれる人はたえすしもみちをつとめてあかしくらしつ
和哥所にある人は。その所をえん事をつとめ行ふ。工商の長もまた同し。何とて君子のおとな。其長たる道をはとひ

つとめぬ。かへつておとなたる威と苞苴をはいとふかう好む。是天下第二の不忠人」(42オ) たるへしや

○賢臣の真忠をよろこぶ

をのれよりかしこき人を進め挙んとたえすおもふそた、しかりける

先賢臣の見は。多くは衆人の見に異なり。今古寵臣の僻病として。嫉心たえやらぬ物也。然るに吾にまされる友を賢なりと進め挙る事。天下無雙の真忠なるへし。あまりに稀なる事なれば。疑心をこる君もあらん。束何かならず韓信を薦め。鄧禹かならず寇恂をす、む。いはゆる大廈は一木の支にあらず。太平は一士の略にあらざる也

○儉約」(42ウ)

家にあらんそのうつはもの本よりも馬車まできよらつくすな

何の調度もあるにまかせて。よきをもとむる事もなく。きらふ事もなけれ。又民の労力をもつて。無益の樂しみをする事なく。過分の茶の湯をすく事なけれ

○身を守る要

世の中の害におちいる人はた、時にたかふとよこしまとなり

程子のいはく時を知り。勢ひを識ものは。学易の大方なり

利欲ゆへこ、ろをよそにせく人の」(43オ) 身はうつせみとなるそはかなき

古今人のほろぶるは。多く利と楽とおほれて也。朱子かいはいく。心は一身の主宰なりと。されは放心の人をみるに。

其身あるしもなき荒屋あらゑの如しごと

さいはひもまたわさはひもわか身みゆへ他人た人よりとは何うらむらん

禍福興廢等の事我よりせずといふ事なし。我心よく修めて。もし人われをあなとらは。自然の命なりとおもひうらむへからず。人多くをのがなす事はよきと思へり。是又まどひなり。哲人てつじん以てよしとせずんは。よきにあらす。唯不中の自慢成へし

○予しめ知るへき事あらか（43ウ）

こ、ろたにおさまりぬれはかねてより人のよしあしするへかりける

一心をおさめんために。汗牛充棟に及ふ書を尽しみるといふとも。まことに至善に止まつて。こ、ろを治むる人は稀なり。かるかゆへに前知する事なし。善にとゞまる事のよはき病根。及第の法なき故か。衆智をかるみつきの法おはさぬ故かなるへし。心をおさむるにも虚実あり。博学審問になき時は。虚をはなれず。ひろく文を学まなひ。篤く志し。仁熟し。我精しくして。おさむるは実ならんや。此上に天命の去就。時の来否。威の輕重強弱などをもかんがへあるひは（44オ）

上以げん言語げんご為を治を則天下以げん言語げんご為を学
至誠しせい有二高人之行たうじんぎやう一見レ非二於世よ一
有二独知之明どくちのめい一見レ怨二于人に一

善を医を病を者不レ視二人之瘡肥にんしやうひ一而察二其六脈之病否みやくのびやうひ一而已矣
治を國を者不レ視二國之安危こくしあんき一紀綱之理乱きかうしりらん而己矣
國を人になして見。安危を肥瘡に。紀綱を脈に比す。脈病ずは瘡るといふとも害なし。脈病ときんは肥るといへとも

死するとかや

好下立二功名一士上聞二
 持重 勇銳 之語一則 易
 難 入。好下立二政綱一士上聞二
 持重 勇銳 之語一則 難
 易 合

第一先我を知事うめるに及びて。而してのち人を知。然してかくのことくの類語類證をも精しく曉得し。国家の盛衰等を推察せは。たがふ事は少(44ウ)なくあふ事は多かるへし。若くかやうの人あらは

○重からずして重物

おもからぬ物しありけりちからある人はもたけし誰かあけけん

天下の重き物は。重からざるの重きよりおもきはなし。是に比すれば。富士山もかろし。天下のちからは。力ならざるの力よりちからなるはなし。金剛力もよはしとす。重からざるの重きものは仁なり。力ならざるのちからなるものは賢也。この至重を。挙るは聖賢なり。政要もまた同し

○萬世の幸甚

みちしある君か御代をは八千世とも(45オ)いのらさらめや億兆の民(46ウ)